

【旅行記】

キリマンジャロで見たもの

茨城県立高等学校 松本穂高

「氷河消滅前のキリマンジャロへ登ってきました。」

こう書かれたハガキが届いた。学生時代のT先生からの年賀状だ。キリマンジャロの氷河が年々縮小していることは、地球温暖化の進行を語る事実として知っていたが、その消滅まであと20年を切っているとのこと。氷河をまとったキリマンジャロの姿がもうすぐ見られなくなってしまう！ 思い立ったが吉日、すぐ手配を始め、飛び立ったのが2008年夏。果たして、アフリカの絶頂で目にしたものとは…

アフリカ大陸の最高峰キリマンジャロ山は、タンザニア北部にあり、ケニアとの国境に近い。南緯3°のほぼ赤道直下に位置しながら、標高5,895mという高さゆえ山頂には氷河が分布する。山頂に立ち、アフリカの氷河を自分の目で確かめたい。それが今回の旅の目的である。

旅の初めはケニアの首都、ナイロビ。UNEP（国連環境計画）の本部が置かれるなど、高層ビルの立ち並ぶ近代的な都市である。しかし一方で、その足下にはスラムが広がる。豊かな暮らしを求め農村から都市に流入してきた人たちが暮らす貧民街だ。電気や上下水道などのインフラは皆無。舗装された道路も見あたらない。住民はどんな苦しい生活をしているのか。踏み入れると、人々の表情はみな笑顔にあふれ、人なつこく楽しそうだ。もしかしたら「無縁社会」に暮らすわれわれ日本人の方がよほど薄幸なのかもしれない。

ナイロビから乗り合いバスで国境を越え、タンザニアに入る（図1）。車窓には草原が広がる。サバナだ。アカシアなど乾燥に強い種類の木がポツポツ立つ。よく見ると、木には葉がついていない。サバナでは、木が葉を落とすのは寒さのためではない。乾燥

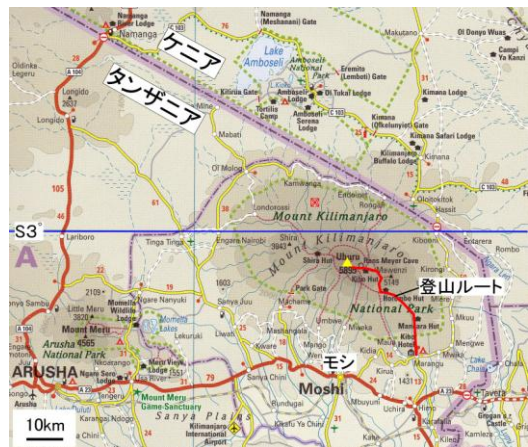


図1 キリマンジャロ周辺の地図



写真1 牛を連れ移動する少年

組むことになるスペイン人カップルのジョルビー、マールと対面。「きのうまでケニアのモンバサで海水浴してたんだ。この登山が終わったらアンボセリでサファリ。1ヶ月の休暇はずっとアフリカだよ、ハハ。」それぞれ獣医師と銀行員の二人は、とにかく陽気で情熱的。このメンバーで明日から臨む山の旅はきっと楽しいものになる。キリマンジャロ登頂も成功にちがいない。

いよいよ登山開始の朝。これから1日につき1,000mほど登り、四日目に登頂、全五日間の行程の始まりだ(図2)。登山口に近い標高1,500mに来ると、サバナはいつしか農村風景に変わった。バナナとコーヒーの木が同じ畑に混じって植えられている。間植・混栽^{かんしよく こんさい}という栽培方法だ。畑に2種類以上の作物を一緒に植えることで、干ばつや害虫の被害を最小限に抑え、また成長する高さの違う作物を用いることで、栽培効率を上げる工夫である。

標高2,000mのマラングに着いた。傾斜があるため、民家はもう立地できない。気温は15°ほどだろうか。半袖ではやや肌寒い。この冷気のため空気中の水蒸気は凝結し、雲ができ、雨となって一帯に降り注ぐ。そのため、ここには熱帯雨林が広がっている。熱帯雨林がサバナより上方に分布することに違和感を覚える。しかしその垂直遷移こそ、赤道直下に位置するキリマンジャロの植生分布の特徴なのである。

熱帯雨林の中をゆっくり歩く。これでもかというほど歩みが遅い。高山病を防ぐためだ。スティーフンが独り言のように「ポレポレ」と繰り返す。スワヒリ語で「ゆっくり、ゆっくり」の意。もう一つ、重要なスワヒリ語を教えてくれた。「ハクナマタータ」。ノープロブレムをくだいたような感じらしい。「なんとかなるさ、気にするな」といったところ。なんて素敵な言葉だろう。

ポレポレを背にゆっくり歩く。周りの森は原生林だ。長いシッコを持つコロバスモンキーが、樹上で食事しながら移動している。板根の発達した巨木は苔むし、ツタなどの地衣類が垂れ下がる。今にも森の神が降臨しそうな深くおごそかな森。その時、木の根元から突然何かが見えた。ついに神の降臨か！ いや子どもだ。一団の少年少女

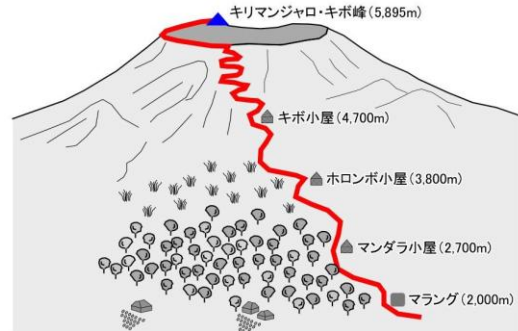


図2 登山コース概念図

が、道端で何かをせがむように、小さな手を出してこちらを見ている。愛くるしい瞳。思わず何かあげたい衝動に駆られる。あげていいものか、スティーブンに聞いてみる。「どうぞご自由に。」ジョルビーとマールは迷わずチョコやアメを配っている。しかし自分には葛藤がある。ここでチョコをあげることで子どもたちは確かに喜ぶだろう。でもそれは、子どもたちの生活向上に役立つだろうか。施す方も受け取る方も刹那主義ではないか。うだうだ考えている間に機は去り、結局、何もあげずじまいとなる。なんだかんだ言って、ただのケチなだけかもしれない。

森が急にひらけた。標高 2,700m のマンダラ小屋に到着。コテージの一棟に入ると、コックがお湯の入った桶を持ってくる。これで顔を洗ったりして使えという。山でのこんなサービス、僕には過剰だ。でもお湯が冷めてはもったいない。顔洗おう。やはりただのケチか。近くを1時間ほど散策し、暗くなりかけた午後6時半、いよいよ夕食。メニューはゆでたジャガイモ、牛肉ステーキ、人参とピーマン入りスープ、アボカド、トマトとキュウリのサラダなど。食堂棟では他パーティーとも相席だ。ロシア人3人組、コロンビア人夫婦、イングランド人単独若者など、国際色豊か。「スペインには 3,000m 程度の山しかないから 6,000m 近い山なんて初めてさ」。「アフリカ放浪の旅のついでにキリマンジャロ登ってみたいくなって勢いで来ちゃったよ」。みな同じ目標を持った集団だけに、すぐに打ち解け話は盛り上がる。

登山二日目、今日は森林限界を越え標高 3,800m まで行く。歩き始めて1時間ほど、標高 3,000m で樹林帯を抜けた。草原のかなたに現れたのが、白い巨大な高まり。キリマンジャロの山頂だ(写真2)。キリマンジャロとはスワヒリ語で「輝く峰」の意。その名のとおり、赤道の太陽に照らされ、自ら発光しているように輝く。森林限界上の草地帯との対照が鮮やか。草地帯にはサボテンのように見える巨木、ジャイアントセネシオが疎らに立っている。谷筋に密集しているのは、水分を求めためだろう。



写真2 キリマンジャロ山頂とセネシオ

その幹には、自らの枯れ葉が何重にも重なっている。乾燥や寒気から身を守るワザだ。この草原が植物にとっていかに過酷な環境かを教えてくれる。その草原を、ポーターたちの列が続く。我ら3人の登山者のために、ガイド2人、コック3人、ポーター7人がついていて。コックやポーターは、客の朝食を片付けたあと出発し、途中で追い

越し、宿泊地に先に着いて食事の準備をして客を待つ。大名行列のような好待遇だが、これがキリマンジャロ登山の一般的スタイル。支払いは1,400米ドル。わずか14万円ほどで五日間全行程の食事、宿泊、人件費がまかなわれている。ポーターの取り分はどれくらい少なくなってしまうのか。英語さえ話せるようになれば、ガイドになることができ、日当は3倍になるという。

今日の宿泊地、ホロンボ小屋に着いた。標高3,800mは富士山を抜く。軽く頭痛がする。同行のマールは高山病か、腹痛がひどいらしい。高山病の症状は、人によって違う。自分の場合は、まず頭痛、次いで食欲をなくし腹痛が襲い、さらに吐き気をもよおす。でも今はまだ食欲はある。大丈夫だ。標高4,000mまで歩きに出かける。夜を越す前に、より高い高度に一度足を踏み入れておくことが高所順応を進める。高度順応には、水分補給も大切だ。代謝を活発にすることで血中に酸素を取り込みやすくするのである。ポレポレ歩行のため汗はかかない。なのに水分を多く摂る。したがって就寝中のトイレ行きは避けられない。氷点下の冷氣の中、寝袋を抜け出すのはつらい。つらいが、大きな楽しみもある。満天の星空だ。空に星があるのでなく、星屑の中に空があるかのような光景に、寒さを忘れ見入る。

登山三日目、今日は標高4,700mを目指す。道中は一面の砂礫地帯となった。所々に矮性化した灌木が生える。乾燥と寒気から身を守るため小型化した木本だ。密生して生えるのは、確実に繁殖するため。岩に腰を下ろしてランチにすると、スズメに似た鳥アルパインシャッドがこちらの様子をうかがっている。ネズミもちよろちよろやって来た。子どもたちには施しを迷うが、野生動物には一切与えてはいけない。でもガイドのフレデリックは、おもしろ半分でパンをエサに捕まえようとしている。まさか今日の夕食にネズミを出すつもりではなかろう。

なだらかな斜面は終わり、山頂火口の外壁末端に近づく。ここに今日の宿泊地、キ

ボ小屋がある。酸素濃度は平地の半分。頭痛がひどい。食欲もない。横になっても休めない。風景を眺めて気を紛らわそう。来た道の向こうにマウエンジ峰(5,149m)が見える。5,500年前に噴出した火口丘だ。反対側の陰にはシラ峰(3,943m)があるはず。これは7,100年前の噴出。そして目の前にそびえるのが目指すキボ峰。2,500年前の形成と最も新しい。この三つの火口丘を総称してキリマンジャロと呼ぶ。



写真3 高山病で緊急搬送されていく女性

夕食はほとんど喉をとらない。ポーターたちがせつかくここまで持ち上げた食べ物を残してしまうことに申し訳なさを感じる。が、スティーブンに聞いてみると、食べ残しはポーターたちがきれいに食べてくれるとのこと。罪悪感は軽くなる。しかし頭は重いまま。頭痛がひどく、二段ベッドの上で眠れない夜を過ごす。深夜11時、一睡もできないままもう起床時刻が来た。腹痛も始まっている。暗く寒い中を歩き出さなくてはいけない思いで、心も重い。

午前0時出発。岩場の道をフレデリックが先導する。睡魔との戦い。歩きながら何度か意識が遠のく。危ない。谷側に倒れ込んだら最後、暗黒の空間に放り出されてしまう。頼りはフレデリックの足下だが、彼の足取りがどうも安定しない。どうやらヘッドライトの電池が切れかかっているようだ。予備電池もない。しばしば正しい道を外れ、ガラガラ斜面の登高を余儀なくされる。とんだ災難だ。ところがこれが福に転じた。眠さが霧散したのだ。下ばかりだった視線を上げてみると、頭上には南十字星が輝いている。急に力がみなぎってきた。水を吸ったサバナの草原のように、細胞の一つ一つがエネルギーに満ちてくる。よし行くぞ！ 先行していたパーティーに「グッドラック」と声をかけ追い越し、ついに火口のヘリ、ギルマンズポイント(5,690m)に達した。ここから山頂まで、直径2.4kmの火口の半周。アップダウンのある道を転落に気をつけながら歩くこと1時間、白みかけていた東の空から突然、光の矢が飛んできた。山が一気に赤く燃えだし、山頂へ伸びる道が照らし出される。山頂はあと少し。駆け出したい。でも息が苦しい。積雪も出てきて足をとられる。ふと目を転ざると、両側にそそり立つ氷河が近い。これこそ見たかったキリマンジャロの氷河だ！ヘミングウェイも書いた「キリマンジャロの雪」がいま間近にある。山頂まで50m, 20m, これ以上高いところがない……とうとう山頂！



写真4 キリマンジャロ山頂(5,895m)



写真5 山頂の氷河

氷河に覆われた山頂域が雲海に浮かぶ。まるで海原に浮かぶ白い船。氷河は、高さ30mの壁で区切られ、その氷壁が雲海の中まで続く(写真5)。この氷壁はなぜできたのだろうか。山頂でしばらく休み呼吸が整ってくると、風景の成り立ちを解きたくなる地理屋の性分が現れてくる。氷河がその断面を露わにするのは、海に落ち込む末端部くらいしかないはずだ。この壁はいったい何だ?!

かつて一帯を覆っていた巨大な氷河は、山頂火口をすっぽり埋めていた。氷河は重力に従って斜面下方へ流動する。したがって、最も高所にあたる火口のへりの部分を分岐点として、火口の外側および内側の両側に向かって離れるように動いていた。温暖化で雪の補給が減ると、その火口のへり部分で、氷河がパカッと割れた。温暖化の進行で、割れ目はさらに拡大。ここに氷壁が現れたのである。氷河期に150km²あった山頂氷河は、1980年代にわずか0.5km²となった。この30年間でほぼ半減という急速なペースで縮小している。つまりこの氷壁は、今まさにアフリカの氷河が消滅寸前であることを示す標識のようなものだったのだ。

下山しながら考えた。氷河がなくなれば、山麓を潤す降水も激減するだろう。ここに暮らす人々の生活はどうになってしまうのか。森で出会った子どもたちは、今後、どのように生きていくのだろうか。

最終日、ガイド、コック、ポーターたち総勢12人が集まり、登頂を祝って唄ってくれた。「♪キリマンジャ～ロ～ ハクナマタータ～ ポレポ～レ～」と繰り返す陽気な歌声がキリマンジャロの空に響く。「氷河が消えてもなんとかなるさ～ 気にするな～ のんびりいこうぜ～」と聞こえた。キリマンジャロの山頂で見たもの、それは消えゆく氷河と、そこで生き抜く人間の姿だった。